

説教のポイント

もしも主が赦されぬなら

ヨハネ一・四九〜五三

詩篇二三〇・一〜八

「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます」
詩編二三〇篇の詩人はそのように叫びます。

私たちの人生も時に「深い淵の底」を経験することがあるかもしれません。例えば、突然の病気や災害のような。こんな大きな苦難でなくとも、日常の中で「深い淵の底」を経験することもある。その代表は、やはり人間関係でしょう。会社や学校、地域や教会、ときには家庭の中で…。人間が三人以上集まれば、そこはもう一つの社会。一人の力ではどうすることもできない大きな力がうねりを打ちはじめます。そんなとき、詩人とともに「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます」と私たちも声をあげたくなる。

人々の大きなうねりに翻弄された一人に、私た

ちの主イエスがおられます。今日ヨハネ福音書では、ラザロをよみがえらせ、人々の驚きと賞讃の的となったイエスに、ねたみから権力者たちが謀議を企てます。その中心人物の一人大祭司カイアファがいう。「二人の人間が国民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方が好都合では…。悪の極致のような言葉ですが、福音書は見逃しません。これは神が語らせた預言だったというのです。すなわち、「イエスが国民のために死ぬと言った」、イエスを殺そうという、その言葉それ自体が私たちのための救いの始まりとなった、と。

神は人間の弱さや罪、悪をも用いて、救いの歴史を動かそうとなされる。神はそれらをすでに赦されているからです。もし主が赦されていなかったら私たちは一瞬たりとも生きていけないでしょう。ほむべきかな、主。私たちはすべてを赦されて今、主のみ前を歩んでいるのです。